

未来へつなぐ

環境にやさしい農業の取組が

私たちが住む地球では、人間の活動により、地球温暖化が進み生物多様性が失われつつあります。こうした環境問題に対応するため、農業生産の現場では、**地球温暖化の防止**や**生物多様性の保全**などに役立ついろいろな取組が行われています。

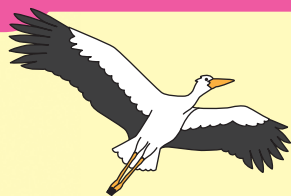
成果をあげています

その一環で進められてきた

環境保全型

農業直接支払制度が

大きな効果をあげていることがわかりました。



地球温暖化防止効果が確認されました

例えば、有機農業をすること。たい肥を使って土づくりをすること。こういった取組により、大気中へのCO₂（温室効果ガス）の排出量を年間約15万トンも削減できることがわかりました。



約 **15** 万トン/年の
CO₂を削減

= 約 **40** 万台の
エアコンが排出するCO₂に相当

※家庭用エアコン（冷房能力2.2kW）の年間消費電力（冷房期間3.6か月及び暖房期間5.5か月）における各機種の平均値（707kWh）と電力の排出係数0.496からCO₂排出量を算出し、台数に換算。出所：「省エネ性能カタログ（家庭用）2017年冬版」（経済産業省資源エネルギー庁）「電気事業者別排出係数—平成29年度実績—」（環境省・経済産業省）

生物多様性が高くなっています

農地は周りの山や川、水路とつながり、さまざまな生きものすみかになっています。環境にやさしい農業を行っているところでは、カエルやクモ、トンボなどが多くすんでいることが調査の結果でわかりました。生きもの数や種類の豊富さは、ゆたかな生態系が保たれていることを示しています。



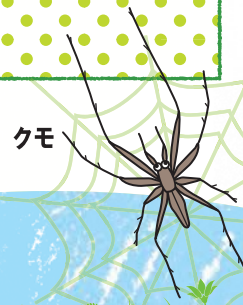
カエル



トンボ



ゲンゴロウ

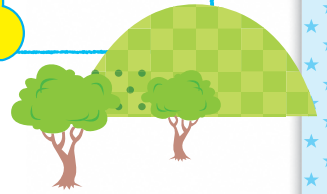
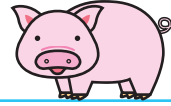


クモ

地球温暖化防止の取組と効果

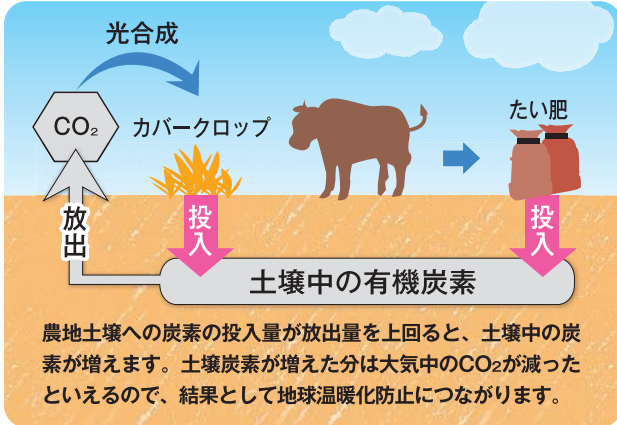
主な取組

「たい肥」を使ったり「カバークロープ」を栽培して土づくりを行うことや、「有機農業」を行うことは、一般的な農法に比べて農地の土壌に有機炭素がより多くたまり、地球温暖化防止に効果があります。



調査結果

農地に炭素がたまるってどういうこと？



※**カバークロープ**：稲を収穫した後にレンゲなどそれ自体は収穫対象とはならない作物を栽培し、土壌にすき込むことで有機物を供給する取組。緑肥ともいわれる。
 ※**たい肥**：牛ふん、わら、もみガラ等の有機物を積みあげ、微生物の力で発酵させたもの。土壌にすき込むことで有機物を供給することができる。

地球温暖化防止効果の調査結果

取組の名称	単位当たり温室効果ガス削減量※ (tCO ₂ /ha/年)	実施面積 (ha)	温室効果ガス削減量 (tCO ₂ /年)
有機農業	0.93	14,537	13,519
カバークロープ	1.77	18,398	32,564
たい肥の施用	2.26	19,890	44,951

その他取組とあわせて **計 150,631 tCO₂/年**

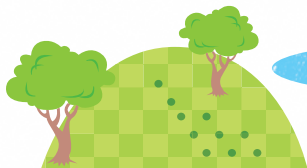
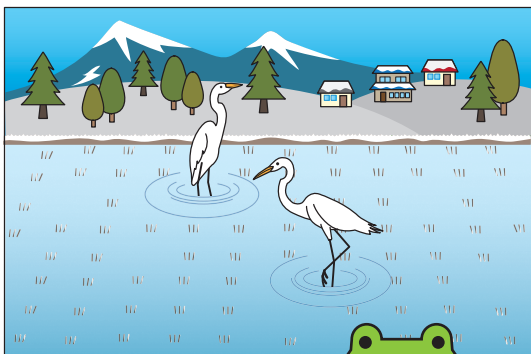
※有機農業やカバークロープ、たい肥に取り組んだ場合と、一般的な管理（化学肥料の使用）を行った場合とで、温室効果ガス排出量を比較（引き算）した数値。

上記3つのほかに地域の実情にあわせた取組（地域特認取組）もあります。

生物多様性の保全の取組と効果

主な取組

化学肥料や農薬を使用しない「有機農業」や、冬期に水田に水を張る「冬期湛水」によってさまざまな生きものが育つ環境をつくります。

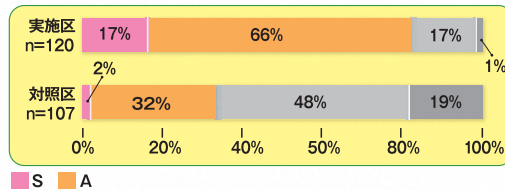


水田の指標生物であるクモ類とその調査法



調査結果

生物多様性保全効果に関する調査結果



取組を行った農地の83%で

S・A
評価

※評価内容
S：生物多様性が非常に高い。取組を継続するのが望ましい。
A：生物多様性が高い。取組を継続するのが望ましい。
B：生物多様性がやや低い。取組の改善が必要。
C：生物多様性が低い。取組の改善が必要。

「環境保全型農業直接支払交付金」について

平成23年度から化学肥料・化学合成農薬を原則5割以上低減する取組と合わせて行う地球温暖化防止や生物多様性保全に効果の高い営農活動を支援しています。

http://www.maff.go.jp/j/seisan/kankyo/kakyou_chokubarai/mainp.html

